

◎シリーズ 長岡京歴史散歩

106

むかしの火おこし法
〜今年の歴史教室から〜

7月25日から3日間、長岡京市埋蔵文化財センターでは「舞いきりの製作と火おこし実験」をテーマに歴史教室を開催しました。

火をおこし、利用することは、人類だけがなし得た特徴的な文化の一つとして非常に重要な意味を持っています。

「火」の最初は、火山や落雷などによる自然発生的な要因で、むしろ恐怖の対象として認識され



▲ 完成した舞いきりをもつ歴史教室参加者

ていたものです。しかし、これを利用することで「あかり」「暖房」「調理」が可能になったのです。今回、19人の小・中学生がこの教室に参加し、自分達で火おこしを体験することによって、改めて人類としての智慧を感じたことでしょう。

火のおこし方としては、大きく二つの方法があります。一つは摩擦方式。もう一つは火花方式です。これらの方法は摩擦方式がおそらく古く、火花方式は鉄器が使われだす古墳時代以降の方法であると思われます。いずれの方法も、火種を作ると、火種から炎にする段階の二段階の作業を必要とします。

摩擦方式を証明する遺物としては、丸い焼けこげた穴が並ぶ板状の木片（火きり板）が各時代に存在することでわかります。これは、木の棒を火きり板の上で回転させ、その摩擦で種火をつくったことを証明する遺物です。

このような回転を利用する摩擦方式では、「舞いきり」と呼ぶ道具を使用する「舞いきり式」、木の棒を両手で挟んで単純に回転させる「きりもみ式」など、木の棒を回す方法の違いによる種類があります。どちらの方法でも火種はできませんが、中でも舞いきり式では、だれでも簡単に火種を作ることができるため、火おこし実験によく使われています。

現在では、さらに簡単に火をおこせるマッチですら家庭から姿を消しつつあります。しかし今も昔も「火の用心」は消えることのない戒めです。火を制御して利用するのが人類の英知なのです。